

「ハニアル」に酔っ払う

北原伸一

Shinichi Kitahara

酔っ払いしめる



イラスト / 永美ハルオ

この原稿を書いている8月24日、すっかり秋の気配を感じ……、などとはまったく縁遠い残暑ならぬ酷暑が続いている。茹だるような暑さと強い陽ざしにバテ気味ながら、パソコンと向き合っている。

〈あつ、今日は、愛酒の日だ。〉

などと、酒をこよなく愛した歌人・若山牧水の誕生日にちなみ設定されたこの記念日を頭によぎらせながら、ふたたびキーを叩いている。

1日一升の酒を呑んでいたという牧水は急性胃腸炎と肝硬変を併発し43年の短い生涯を閉じるが、9月のまだ残暑が残る時期に没したにもかかわらず、腐臭がしなかったのは、「生きたままアルコール漬けになっていたから」とさえ言われる。

〈人の世にたのしみ多し然れども酒なしにしてなにとのたのしみ〉

〈ものいはぬ我にすすむるうす色の昼のひや酒妻もかたらず〉

旅の歌にも郷愁を誘われるが、さすが酒仙の歌人・牧水、酒賛歌は飲み人の心を巧みに突いてくる。

気がつくとも自然と足はキッチンへと向かっていた。牧水の歌がそうさせたのだ。

原稿を途中で投げ出し、この暑さを吹き飛ばすべく、生ビールをグビグビのみたい。ちよほどお預けをくらった犬が、エサを目の前にして、よだれをダラ

リと垂らす。そんな極限状態に置かれている。

犬よりも辛抱できない心の弱い筆者は、後ろ髪を引かれる思いながらも、家人に悟られずキッチンに潜入、冷蔵庫をそつと開ける。そつと開けたのは、後ろめたさというより、冷蔵庫の冷気を逃がさないためだ。こんなときだけ、節電意識は妙に高い。

冷蔵庫の中で、缶ビールがほどよく冷えている。遠距離恋愛の恋人と久しぶりに再会するときのような高揚感。

そこへ細君の声。いつきに現実を引き戻される。

「いやなに、原稿に詰まったもんだから、気分を変えようよ……」

「気分を変えるためにビール飲むんかいつ。結局、酔っ払って原稿はまた明日、つてことになるんでしょ。それよりはやいとこ原稿仕上げちまいな」

酔人の気持ちに分からない人には理解できないのだろう。しかたなくビールを冷蔵庫に収め直し、アイスコーヒーでも淹れようかなと思ったら、再び細君。

「ノンアルコールビールなら買っておいであるわよ」

いま流行りの酔わないやつか。もう数年前のことだが、一度だけ飲んだことがある。ミーハーで新しい物好きの性格は、鳴り物入りの新発売と聞けば黙っ

ていられない。だが、ビールに似せたと

いうメーカーの努力は認めつつも、ビールの味とは程遠く、筆者の記憶では、ビールだけに、苦い思い出しかない。

「最近のノンアルコールビールはとても美味しいのよ。カラオケ仲間と歌いまくるときはこれに限る。すごく盛り上がるわ」と、細君は言うが、おばさん連

中のカラオケ大会は、そもそも何を飲んでも大盛り上がりだから、アルコールだろうが、ノンアルコールだろうが、飲み物は関係ない。

元祖はシャンメリー

酒の味が好きだから飲むのか、酔った感覚が好きだから飲むのか、と聞かれれば、若いころは、ワイワイと楽しい酒が好きだったことから、酔うことを優先していた。だが、齢を重ねることに、その奥の深さを知るようになり、味を優先するようになった。

だからこそ、ノンアルコールのクオリティには厳しい目を向ける。

「だって、雰囲気潰しちゃうでしょ。ちよつと飲んでみてよ。ぜつたいこれはジュースじゃなく、カクテルなのよ」

行きつけのスナックのママは、こう言う。元来酒に弱いこのママは、おそらく酒で失敗したことがあるのだろう。それまではウーロン茶を薄めて、ウイス

キーの水割りと称して、酔客をもてなしていた。だが、それもすぐにバレ、場が興ざめたことがあると言う。だから最近はこの、カクテルもどきをグイグイ煽るのだという。

「飲んでみてよ。そりゃ、酔わないけど味はカクテルよ」

一口ご相伴に与る。なるほど、こりゃカクテルだ。しかし、ノンアルコールは……。

「ノンアルコールだって昔に比べるとてもおいしくなったのよ」

だまされたと思つて注文してみる。なるほど美味い。これだけクオリティがあれば話題になるだろう。

それにしても、いまやノンアルコールの、酒類は数多い。酒の種類の数だけノンアルコール飲料があるようだ。

幼いときの記憶を紐解けば、クリスマスには、「シャンメリー」というシャンパンもどきを大人気分で飲んだことがある。

全国清涼飲料共同組合のHP（ホームページ）には「シャンメリー」の歴史が記載されていた。

〈シャンメリーは、シャンパンをヒントに誕生しました。時は昭和22年。戦争の爪痕が生々しく残る東京で、進駐軍が楽しげに飲むシャンパンを、安価で大衆が飲めるものにしたというある東京の飲料業者の熱意から生まれました。

売り出したばかりのこの『ソフトシャパン』を当初は飲食店を中心に売り歩きました。その後、栓を締め付けるための製造機械が開発され、多くの中小企業が参入。またクリスマスパーツィ用として、三角帽やクラッカーとともに販売したところ爆発的な人気を呼び、広く一般に普及しました。

昭和40年代には「乾杯飲料」としてすっかりおなじみになりましたが、フランス政府からシャパンの名称の使用禁止を求める動きが起り、昭和48年に現在の『シャンメリー』に改称。昭和51年には全国シャンメリー協同組合が商標登録を受けています。

その流れを汲むノンアルコール飲料は、ビール、日本酒からマッコリ、ノンアル

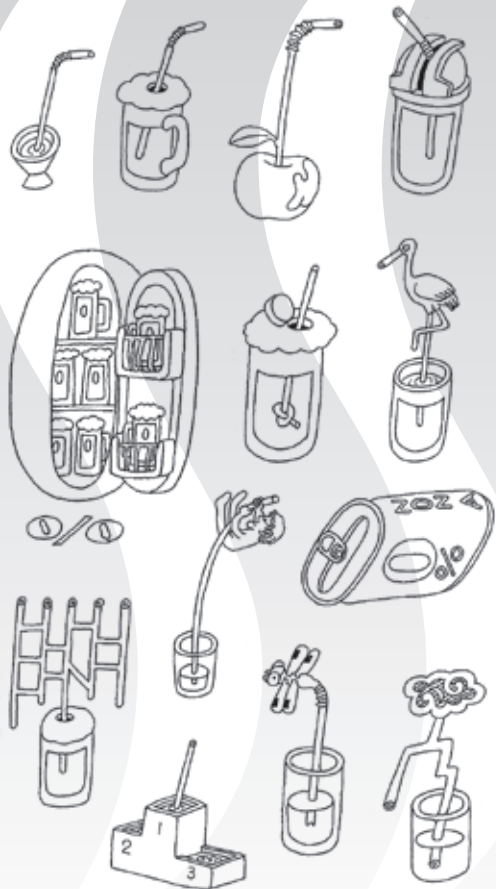
の酒粕までジャンルも広がった。

ウイスキーボンボンと奈良漬と

〈あるとき、(タレント仲間の)有吉弘行が上島行きつけの店で勝手に上島のキープしていたボトルを飲みきり、いたずらで中に水を入れた。数日後に竜兵会でその店に行き、上島がそのボトル(水)を飲んでいると、2時間でペロペロに酔っ払ったことがある。〉

芸人『タチヨウ倶楽部』の上島竜兵のエピソード(Wikipedia)を読むと、なんと竜ちゃん(敢えて親しみを込めて呼ばせてもらう)は、水でペロペロに酔っ払ってしまうらしい。

竜ちゃんの逸話がウソかホントかは



さておいて、ノンアルコール飲料では酔うことがあるのか。その定義は「アルコールが含まれない、もしくは1%未満のアルコール分を含むアルコールテイストの飲料」とされ、日本の法律では清涼飲料水に分類されている」とある。

つまり、1%未満は酒とみなされないうが、アルコールがまったく含まれていないとは言えない。だから極端に酒に弱い人がノンアルを大量に飲んだ場合、酔う可能性がある。ウイスキーボンボンや、奈良漬も酔うとは思えないが、酔わないとは言いい切れない。

そういえば酒で身体を壊した知り合いの弁護士は、それ以来一切アルコールを口にしないが、どうしても飲まなければならぬ席で、仕方なくノンアルコール飲料を飲んだところ、微量のアルコールに身体が反応し、酔っ払ってしまったと真顔で語っていた。

やはり同じことを考える人がいるようで、インターネット上には、どれだけノンアルコール飲料を飲めば酔うのか、挑戦している人がいた。

まず酔っている定義を道交法の酒気帯び運転の数値、呼気1リットル中に含まれるアルコールを0・15ミリグラム(成人男性ビール大瓶1本)とした。実験に使用したノンアルコールは0・1%未満と記されたもの。アルコールチェッカーを手元に置き、検証開始。4本、5本と空アル

ミ缶が増える。精密なチェッカーではなかったようだが、8本目に反応が出た。計算上では0・8%だった。実験者は「実際、酔った感じは全然無し」と言うが、ノンアルコールも量をこなせば、確実に酔うということだろう。

ちなみに前出したウイスキーボンボンは実際のウイスキーを水飴や砂糖を溶いた水で割ったものを使用しているから、おおよそのアルコール度数は20%弱、また奈良漬のそれは2〜7%と言われており、大量に食べれば酔うだろう。

それを逆手に取るこんな報道があった。

〈福岡県警東署は10日、道路交通法違反(酒気帯び運転)の疑いで、福岡市東区のパティシエ(29)を現行犯逮捕した。容疑者の逮捕容疑は、10日午前3時5分ごろ、酒気を帯びた状態でミニバイクを運転した疑い。フラつきながら運転しているのを東署の署員が見つけた。検査の結果、呼気から1リットル中0・15ミリのアルコールが検出され、現行犯逮捕となった。〉

容疑者は当初、「お酒の入った洋菓子をたくさん食べた」と言い訳して、何とかその場を逃れようとしたが、「かなりの量を食べたとしても、これだけの濃度が出るとは考えられない」と署員が追及。10日昼ごろからの本格的な取

「ノンアル」に酔いしれる



り調べで、「飲んでました」と容疑を認めたといい。

酒気帯び運転の言い訳例で、よく登場するのが「奈良漬け」。今年1月にも岡山県真庭市の臨時職員の男(45)が同市内で軽トラックを運転中、酒気帯び運転で摘発され、呼気から1リットル中0.2ミリのアルコールが検出された。

県警の調べに、男は「奈良漬けを食べただけだ」と供述したが、これはアルコール3%の奈良漬けを150切れ以上イッキ食いしても出るか出ないかの数字で、こちらも後刻、飲酒を認めている。

福岡県警東署は10日、「ケーキだろうが、奈良漬けだろうが、運転中に呼気から基準値超え(0.15ミ)のアルコールが出れば違法。言い訳にもならない」とカンカン。(4月11日付「サンケイスポーツ」)

実際、警察庁は05～06年度にこんな実験を行っている。栄養ドリンク1本、奈良漬50グラム(7切れ程度)、ウイスキーボンボン3個、ノンアルコールビール355ミリリットル缶2本を15～20人にそれぞれ飲食させ、呼気中のアルコールを調べたところ、全員が20分後には呼気中濃度がゼロになった。同庁交通局は「普通考えられる程度の量なら、栄養ドリンクや奈良漬を食べても運転に大きな影響は出ない」と「言い訳」にはな

らないと断言した。

さらに最近ではアルコール度0.00%のノンアルコールも市場に出ている。これなら完全に運転前に飲んでも問題ない。だからといって、子どもには飲ませてはいけない。

大手ビール各社は判を押したようにならうに注意喚起する。

(未成年の飲用は、)法律上問題はありませんが、ビールテイストの炭酸飲料のため、未成年者の飲用はお勧めしません。この製品は20歳以上の方の飲用を想定して開発しました。)

では仕事はどうか。文具のコクヨは今年6月から商談スペースで、お茶代わりにノンアルコールビールを出し始めたという。それで打ち解けて商談もスムーズに行くのだとか。

しかし、『日本経済新聞』の調査によれば、ノンアルコール飲料の許容についてのアンケートでは、「会議中」が92%、「仕事中」91%、「仕事の休憩時間」89%、「運転しながら」78%とNG回答がだんぜん高く、ビジネスシーンに溶け込む土壌は整っていない。

ノンアルコール飲料が酔仙歌人・若山牧水の好みに合うかどうかはわからないが、少なくともノンアルコール飲料を1日一升飲んでいくれたら、もっと多くの酒賛歌を詠んでくれたに違いない。かっただらう。